

特別レポート

# 仲間との信頼感の中で学び合い “引き出し”を増やす小論文の授業

東京都立町田高校「現代文・小論文秘密クラブ」

生徒たちが学び合いながら小論文の力を身に付けていく。そんな授業が、東京都立町田高校で試みられている。知識やノウハウを教えるだけでは体得できない、自分の主張や具体例などの“引き出し”を、生徒たちは対話の中で増やしていく。



東京都立町田高校 松澤美奈子先生

を生み出したか説明していく。生徒の話が終わると、今度は松澤先生が講評。課題文の作者がキーワードに出した言葉をきちんと理解して盛り込めていた点や、自分の主張を明確にできた点を評価したが、言葉の選び方に間違いがあったことや誤解されやすい表現が結論部分にあったことを指摘。読者や採点官に誤解されないように伝えるためには、「他者の目になって推敲する」ことや、「自分の『美学』を捨てて、相手にきちんと伝わる文章にする」という点が重要だと強調した。

その後も同じように、生徒たちの講評→作者の生徒の説明→松澤先生の講評というパターンで進行。生徒たちは、聞いているだけではなく、「先生、それってこういうことですか？」など

と発言が次々に出てくる。講評は対話を重ねるように進んだ。

### 生徒たちが望み 誕生した有志の会

町田高校では、毎週土曜日に希望者対象の「土曜講習」を開いている。「現代文・小論文秘密クラブ」は、この土曜講習から派生した特別な講習会で、日曜日や祝日などに不定期で開かれる。対象は2年生。彼らが1年生のとき、土曜講習で松澤先生が小論文の指導をしたところ、「2年生になってもやってほしい」という要望が生徒たちから出て、有志の会として誕生。

講習会は、二部構成になっている。第一部は、生徒同士で小論文を講評し合う「小論文コンペ」。第二部は、入試問題を初見で解く「初見でドン!」。時間の配分は、第一部が約2時間、第二部が約1時間だった。

また、この講習会では、事前の準備でも多くの時間を費やす。松澤先生が開会日を決めると、約1カ月前に担任を通して参加者たちに課題プリントが配布さ

### 競い合って学び合う 対話のような授業

2月11日、休日の朝、生徒たちが一人また一人と図書室に集まってくる。広いスペースに並ぶ学習机に着き、事前に配布されたプリントをカバンから取り出して目を通したり、友達に話しかけたりして、「現代文・小論文秘密クラブ」が始まるのを待つ。午前8時30分。開始時刻になると、松澤美奈子先生（国語科）が皆の前に立つ。

この日、自作の小論文を講評し合う講習会に参加したのは、12人（登録者は21人）。「それではいつものように、まず家で読んできた小論文の中でベスト1を投票してください」と松澤先生が言うと、生徒たちはアルファベットを書いた付箋紙を渡していく。

生徒の手元には、全生徒の小論文が載っている「課題作文集」がある。作者の生徒の名前は伏せてあり、名前の欄にはAやBなどのアルファベットだけが書いてある。生徒たちは、事前に

読んでおき、自分以外の作品の中で一番良いと思ったものを選んでいった。

すぐに集計してランキングを発表。複数の票を集めた作品は二つで、4票を集めた作品が一つ、3票を集めた作品が一つだった。

「それでは、一番多くの票を集めた作者Jさんを推した方は起立。どかが良かったのかを話してください」と松澤先生。4人の生徒が立ち上がって、一人ずつ講評を始める。「構成がしっかりして

いて、論旨が一貫している」「自分の考えがきちんと書いてある」「最初の段落で自分の意見をきちんと言っている」などという客観的な意見がある一方で、「第二段落がかっこいい」「共感した」「読んでいて、『そうそう、よく分かる』と思った」などの主観的な感想も目立った。だが、松澤先生は何も言わない。口を挟むのは、生徒の説明が皆に共



「現代文・小論文秘密クラブ」は休日に図書室で開かれる。1年に5回ほど開催。

有できるように補足するときだけだ。

生徒たちの講評が終わると、作者の生徒の名前が明かされた。一人の男子生徒が恥ずかしそうに立ち上がり、松澤先生から「初めて一位になったね」と言われると、「皆の話を聞いていてとても照れたけれど、すごくうれしい」と心境を語る。「工夫したところは？」と問われると、実験をもとに書いたことを明かし、どんな考えでこの小論文

ない。先生が書いたと分からないようにして生徒の作品の中に紛れ込ませる。「筆跡を変えたり、ときには自分の娘に代筆させます」と、その手口は巧妙だ。「私が生徒のふりをするのは、横の関係で気付いて欲しいからです。それと、生徒の立場からすれば、作文の書き方についてもアドバイスだけをもらっても、具体的にどうすればいいのか分からない。だから、『例えばこんな風に書くと伝わるんじゃないか』という感じで、具体例を示したいんですね」

### 最後まで聞くという 安心感が生徒を変える

授業後、生徒たちに話を聞くと、この講習会には「自分をさらけ出せる」独特でアットホームな雰囲気があるという。生徒の講評は良かった点にフォーカスするので甘口が多いが、ときには「こうすればもっと良かった」という辛めの助言も出る。生徒の中には、わざわざ講評の内容を文章に書いて来て発表する者もいた。この生徒は、当の

作者よりも深く読み込み、ほかの生徒たちは「自分以上に分析していて驚く」と喜んでいる。また、作者の生徒が自分の小論文を説明するときも、素直に自分の思いや考えを出す光景がしばしば見られた。ほかの生徒から横槍が入ることも多いが、それは話している生徒の論点を明確にする愛の「ツッコミ」だったりする。

■生徒の留意事項

事前に配布される「課題作文集」には次の留意事項が書かれている。

- 一 講習当日までに、全ての作文に目を通すこと。
- 二 講習当日もこの作文集を必ず持参すること。
- 三 最も優れていると思う作品を自分の作品以外で一つ選ぶこと。(作品は全て匿名になっている。)
- 四 選んだ作品のこういった点が優れているか、理由を一分程度で説明できるようにしておくこと。

印象的だったのは、先生も生徒たちも、ほかの生徒が発表しているときは、決して遮らず、

最後まで受け止めようとする姿だった。最後まで聞いてもらえらるといふ安心感が、「ツッコミやすい」環境を生んでいるように思えた。生徒の声の中にも「ほかの人からツッコミをもらえらるのがうれい」「もみくちやにされて自分を磨きたい」などという意見が多かった。このツッコミ合うスタイルについては「間違ったことを書いてはいけない」という責任感が出てくる」「私は主観的に読んで書いてしまうところがあるので、友達に率直なコメントをもらえるのがありがたい」と前向きな評価が目立った。また、「説得力のある文章には良い具体例が必要だと気付かされた」と言う生徒もいた。松澤先生は、生徒がほかの生徒との交流の中で、主張を補強する具体例の「引き出し」、生徒の言うところの「ネタ」を増やしてほしいと願っている。

助言は話の流れで必要となるときだけ

松澤先生の工夫の一つは、生徒との対話の中で小論文の大切

松澤 入学してくる生徒の日本語能力に、とても不安を感じたからです。都立高校の場合、推薦入試だと小論文を書き、一般入試なら国語で200字程度の文章を書くのですが、その採点をしていて、書くという能力について非常に問題があると思っただんです。対策が急務だと思いました。

しかし、書くという能力は、一朝一夕には身につかないものです。普通の授業でも、話す・書くというアウトプットの機会が少なくない。それなら、話す・書くことを厚めにする授業はできないかと考えたんです。

ただ、むやみに書かせると、好き勝手な落書きのような文章になってしまいます。それで、大学入試を意識した内容にしようとして、小論文の講習会という形を考えたんです。

この講習会は、生徒たちが主体的に学び合う、アクティブラーニングの場です。

松澤 そうですね。私は極力話さないようにします。生徒たちが学び合うような機会、なるべ

く生徒がほかの生徒のために活躍できる機会を多くするようにしています。だから、板書もしません。私の話だけでなく、ほかの生徒の横槍も含めて、よく聞いて自分で必要なことを取捨選択しながらメモして吸収していくということを主体的にやらせるようにしています。横槍こそ、自分にとって一番大切な源のようなものがある。それを知って欲しい。

この小論文講習会は、どのような効果をもたらしていますか？

松澤 昨年度から始めたので、進学との関係がまだ分かりませんが、この講習会に参加している生徒たちが、この学年の牽引者になってくれているとしたら嬉しいですね。

また、この学年には、小論文の模試(学研「アンカー小論文」)を生徒全員に受けさせました。戻ってきた評価を見ると、辛め

でした。A評価の生徒は一人もいなかった。最高でB。この講習会のメンバーでも、Bの生徒は数人でした。ただ、DやEを出してしまっただ生徒が学年で

なポイントを伝えていくことだ。例えば、自分の主張ができない生徒がいれば、「小論文とエッセイは違う」と教えて、どうすれば自分の意見が作れたのかを説明していく。ある一人の生徒は、うまく書けなかった自分の小論文について、どのように悩んで書いたのかを語ると、小論文に書けなかったその考えの中に、主張できるものがあつたと指摘。課題文を正しく理解していれば、その考えを自分の主張に変えることができ、具体的にどう展開すれば良かったのか例示した。

小論文の指導で難しいのは、生徒一人ひとりが自分の経験や見聞を土台に独自の主張を作り上げなくてはならないことだ。

この「主張の壁」をクリアするためのマニュアルはなく、何

は多い中、この会の生徒の多くはCだったので、悪くはなかったと思っています。生徒の発言を受け止め続ける松澤先生の姿が印象的でした。議論の筋が多少離れても、途中で遮るようなことをせず、生徒たちの話の流れの中で助言を巧みに入れていましたね。

松澤 誠実にやり取りをす

ています。ただ、オールアドリブなので、実際は毎回ドキドキですね。生徒たちからどんな話が出てくるか分かりませんが、話を少しでも聞き漏らすと突っ込めないの、いつも頭の中はフル回転。常に生徒たちが見落としている大切なことは何かと考え、手探りで授業を進めています。

この講習会で目指すところは、何でしょうか？

松澤 「引き出し」を増やすことです。「引き出し」とは、具体例の豊富さのことです。具体例は主張を補強するためにあるものです。その具体例を、



生徒同士で対話しながら、「ネタの引き出し」を増やしていく。

かのきっかけを自ら掴んで乗り越えるしかない。ただ、そのきっかけを得る方法として、ほかの人がその壁を乗り越えるところを見て自分なりに試すというやり方がある。そんな気付きの機会が、この講習会には多く見受けられた。

「松澤先生インタビュー」

なぜ、小論文の講習を始めようと思ったのですか？

一人で考えることには限界がありますが、多人数で学び合うことで一気に「引き出し」が増えるメリットを、この講座での一番の効果と考えております。生徒の言葉ではそれを「ネタ」と言うようです。生徒が横のつながりで得る「ネタ」が豊富であるというのは大事なことです。ね。小論文は比較的、個人添削になりがちですが、集団で学ぶ利点はここにあると思っております。(取材・構成/宇津木聡史)